令和３年度

第60回 長野県保育研究大会

10月17日　小諸市で開催　分科会は初のオンデマンド配信

保育しなの

発行所
（一社）長野県保育連盟
長野市大字中御所字岡田98-1
長野保健福祉事務所庁舎内（2階）
TEL026(228)4415
FAX026(228)9443
e-mail:kenhoren@khaki.plala.or.jp
https://horen-nagano.jp/
題字　海野会長

大・会・宣・言

本日、第六十回長野県保育研究大会が、「住みたい　行きたい　帰ってきたい　まち　小諸」を掲げる、詩情あふれる高原の城下町、小諸市をメイン会場にして開会されました。そして、これから十一月末まで、インターネットを活用し「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」の主題のもと、県内保育関係者が保育を取り巻く様々な課題解決に向けて研究協議します。

平成二十七年以降、「子ども・子育て支援新制度の導入」、「保育所保育指針等の改定施行」、「幼児教育・保育の無償化」などの新しい保育制度が導入される中、２歳までの保育所利用児童数増加、危機管理、食物アレルギーや配慮を要する子どもへの対応など保育の役割が増加し続けています。さらに新型コロナウイルス対策が加わり、保育士不足が解消していない保育現場には困惑が広がっています。一方、長引くコロナ禍で、保育の大切さが保護者や社会に再認識され、我々保育者に感謝のメッセージが届けられています。

こうした中、子ども達には、予測困難な時代にあっても、前向きに変化を受け止め、よりよい豊かな未来の創り手になっていくことが期待されています。そして、その基盤となる新しい保育実践が必須となっています。また脳と発達の関係を研究する科学者からは、生物としてのヒトにとって母親が一人で担う子育ては不自然で、共同養育の必要性が強く求められています。私たち保育関係者は、こうした責務と役割を果たし、養護と教育が一体となった保育の重要性を広く社会にアピールしていくことが大切です。そして、未来に向かって無限に伸びる可能性を秘めた、すべての子どもたちの健やかな育ちを支え、地域に豊かな子育て文化を根付かせていくため、創意と工夫に満ちた積極的な取組みを続けていくことが強く期待されています。

この大会で行われる研究協議により、多くの先駆的で効果的な実践の学びを習得することができます。こうした研修の成果を活用し、子どもたちの安全と健やかな成長を支え、心豊かな次世代を築いていくという使命を達成するため引き続き専門性の向上と自己研鑽に努めていくことを誓い、宣言します。

令和三年十月十七日

第六十回 長野県保育研究大会

保育功労者表彰

長野県保育連盟会長表彰

（敬称略）

松本市　こども部保育課
指導担当係長　市川　美千代

佐久市　岸野保育園
保育アドバイザー　鷹野　正子

保育事業の推進に寄与し、功績が顕著であることから表彰されました。おめでとうございます。

市川さん　鷹野さん

第六十回長野県保育研究大会を終えて
～私達はコロナ禍に負けない～

実行委員長　小諸市
塩川　英子

人に会いたい！人が恋しいと思った二年間、六十年という重みと歴史のある、この大会！今日までつないできた大会の火を絶やすわけにはいかない。コロナ禍であったとしてもやれるかも、やってみようという気持ちが湧いてきた。そこには、こんな時だからこそ、どんな形であれ、やらなければという強い気持ちが小諸のＭＡＮパワーに変えた！

ハイブリッド方式！

六十回目にして初の試み。やる側の私達もワクワクした！どんな大会になるのか！大会に向け動き出したのが、約三か月前！

まさに短期決戦！

そして、令和三年十月一七日を迎えた。

塩川実行委員長

収束の見えないコロナ禍で
私達は信じていた！
この大会が実現できることを
新しい時代にあった形で。
小諸の地に足を運んで下さった皆様
県下32のレポート発表の皆様
オンラインでご講演してくださった
明和政子先生
ありがとうございました。
オンデマンド配信は絶好調！
一人でも多くの保育士さん！
学びの場にしましょう。
第六十一回は飯田市様
よろしくお願い致します。

小諸発　飯田行き！
ＫＭＲ２０２２便
飯田へ向かって
ＴＡＫＥ ＯＦＦ !!

60th THE KOMORO CITY

分科会

第1分科会

0、1歳児の保育の実践
～発達を促す環境～

参加者　九名

●研究協議の柱

＊子ども達が安心して安全に遊びや生活が出来るための環境はどうあったら良いか。

＊主体性を育むための環境作りや、保育士の援助はどうあったらよいか。

●協議のまとめ

○子どもの成長過程と姿に合わせて環境を変えていく必要を感じる。物の取り合いなどの自己主張等を大切にし、子どもの姿に応じた環境設定が大切になる。0、1歳児は発達の差が著しいため部屋のパーテーションや遊びのコーナー等を工夫したい。

○主体性を育むためには、子どもが何をしたいか、何を考えているか等姿を読み取り、未満児会等で子どもの姿の理解と援助方法を共通理解しておくことが大切になる。保育士それぞれの子どもの理解の仕方や考え方を、出し合い話し合う事で子どもをより深く理解出来、次の援助に繋げていけると思う。

○子どもが楽しい・やってみたいと思えることが主体性に繋がると感じる。子どもの思いを大切にしながら、一斉保育の中で子どもを無理やり遊びに入れ込む事や自由遊びの中でただ子どもを見ているだけの援助ではなく、子どもが遊びたくなるような後押しができる援助がしたい。

●助言者より

長野県福祉大学校
非常勤講師　塩澤　いほ江

○複数で保育するため、組織として高い目的意識を共有することが保育の質を高めていくことになる。職員会等で、子どもの姿の理解・保育内容・職務内容などを協議し、共通理解して保育にあたりたい。

○信頼出来る大人との関係の中で、安心して成長していける。保育士の温かい愛情ある見守りや声かけ、スキンシップ等、応答的な関わりが何よりの子どもの成長となる。

○安全管理で重要な事は、子ども自らが危険を感じ避けられる事。その機能が未熟な0、1歳児は、保育者が考えられる危険を十分に取り除いた援助や環境作りが必要になる。

○個々を尊重した丁寧な関わりから『寝る』『食べる』等、個々の子どものリズムが一定に整いクラスの中で揃い始めてくる。1歳頃にはクラスとしての日課が成立出来るようになる。個人差は大事にしながらも一緒に遊んだり、食べたりの生活することを取り入れていきたい。

第2分科会

2歳児保育の実践～自我の受けとめ

参加者　九名

●研究協議の概要

・自然の中での体験を通して子どもたちが遊びこめる環境をどう整えていくか

・自我を受け止め、子どもたちの思いに寄り添いながら保育をする中で大切にしたい事は

●協議のまとめ

・自然は子どもが自分自身で探索して遊ぶ場。土に触れる・虫を見る・草を触るといった直接体験を大事にしたい。

・自然の中に出掛ける事が一番の環境設定。園外に出ることはリスクもあるが、子どもの命を守りながら探索を楽しむ子どもたちの行動を保育士がどこまでやっていいかを増やせるか、制限するのか・・・予測の出来ない危険を把握し、楽しめる環境作りを工夫することが主体性を育むきっかけになる。

・同じ子の場面でも先生によって違う対応や保育観がある中、意思疎通をしながらすり合わせることで人的環境や安全面を整えていく。

・自我とわがままの線引きの難しさを感じる。保育経験からの決めつけが子どもを制限していないか、ダメなことは本当にダメなのか、当たり前の保育を見直すきっかけになった。

●助言者より

佐久大学信州短期大学部
客員教授　上原　貴夫

・自我を広く捉える。やりたい、やりたくないなどすべてを含んだものが自我である。ありのままの表現を受けとめる。

・イヤイヤは「～したい」を一生懸命アピールしている。子どもの主張・表現からその子の本当の気持ちを読み取っていくことでその子に沿った向き合い方ができ、その子のやりたい事が分かってくる。

・その子なりの考えにのっとっていつかは～できるようになるだろう、と読み取りの工夫をする。共感的＋対話的に向き合っていくことで互いの気持ちを結び付けていく。

・環境は人と自然に分かれる。人は一面的になりやすいので共通認識を持つことが大事。個別・固有にならないためにその日の振り返りとしてエピソード記録をとり、記録を積み重ねていくことがその子についての理解・読み取りにつながる。

・園の集団生活の中で小さいうちから刺激の多い環境を作り、子どもが自分で選ぶ機会を作っていくことでやがてその子なりに状況にあった行動を身に付けていく。

第3分科会

3歳児保育の実践～他者への気づき～

●研究協議の概要

参加者　十一名

○自分の思いや考えを表現し、あそびが展開していくための環境や援助のあり方はどうすればよいか。

○コロナ禍で、子どもたちの園での様子や成長を家庭にどう伝えていったらよいか。

●協議のまとめ

・子どもを真ん中にして信じて一歩引いて見守ることで、あそびが展開していく。保育者は子どもたちがどんな学びをしているか見取り職員間で共有することが大切である。

・日常の保育の見逃してしまいそうなところを見逃さずに対応することで、子どもたちが自信を持って思いを伝えることができるのではないか。保育者は聞き役になることが大切である。

・一日の園での様子や子どもたちだけの行事の様子をドキュメンテーションや連絡帳、学級通信、電話などで保護者に丁寧に伝えた。ＩＣＴを使うこともコロナ禍だからこそ良いのではないか。大事にしたいことを精査し取り組んでみることが望ましい。

●助言者より

上田女子短期大学
准教授　酒井　真由子

・思いを伝えることより、一歩手前の何か言いたいときに言える場があることが大事。保育者は「言いたい」「(友だちの話を) 聞きたい」という場を作ること。言えない時は、無理に話さなくてもいいという雰囲気作りが大切である。

・子どもが「じぶん（わたし）」の存在に気づくには、他者がいないと気づくことができない。トラブルはじぶんを再確認できる場であり、そこから主体が生まれる。主体は子ども同士の関係の中で「みんなと共に暮らすわたしとして何をしたいか考えることができること」であり、周りの人のこととじぶんのことを絡めて考えることができることである。

・子どもの世界は友だち、先生、家族が隣にいて興味を持っていることから広がっていく。子どもの世界が広がるということは大人のその子に対する見方も広がっていくということに連動している。

・図鑑は知識を得ることはできるが、その前の段階の感動や思考を停止させてしまう危険性がある。最初から置くことをせずタイミングをみて置くことが大切である。

第4分科会

4、5歳児の保育の実践
～集団の中で育ち合う～

●研究協議の柱

参加者　八名

主体性を育むための環境とは
～人的環境（仲間や保育士との関わり）、環境構成の視点から考える～

●協議のまとめ

・「自由遊び」という言葉を使わない流れがある。遊びが主体であることから、一人ひとりが好きな遊びを見つけ、十分に遊び込む環境の充実が重要である。

・遊びの中で、様々な必要感が生まれる。クラス活動と個人の興味関心に沿った遊びのどちらも大切である。保育者は、子どもが今、何に興味関心を持ち、何を求めて、何をしたいのか考えて環境構成することが重要となる。

・継続した遊びがあることで安心する子どももいる。仲間と遊びを発展させていく姿に育ちの芽があった。また個人の遊びを保証することで遊びの選択肢も増えたのではないか。

・物理的、視覚的に見通しを持ちやすい環境が、安心につながり自己を発揮し、主体的に遊ぶ姿につながるのではないか。

●助言者より

長野県立大学
准教授　渡邉　望

・物的環境では、子どもの心の距離と物理的な距離を近づけることに意識を向けると、遊びの充実につながりやすい。

・クラス別活動は子どもの興味を広げるきかっけになるが、一度の経験で何かを身に付けることは難しい。継続して経験できる環境を整え、工夫や試行錯誤を繰り返す中で定着できるように配慮する必要がある。

・子どもの主体的な遊びを支えるためには、遊ぶ姿をよく見ること、小さなつぶやきにも耳を傾けることが大切である。その中で、保育者の願いや保育的な視点（ねらい）と照らし合わせて、遊びが継続、発展するようにタイミングよく取り組んでいきたい。

・豊かな遊びを保証するためには、園内のみにこだわらず、地域資源（人、空間、自然物、店舗など）の活用も検討する必要がある。一人の保育者で実践しうる内容には限界もあることから、園内や地域で、育ち合える保育者集団を目指してほしい。

第5分科会

異年齢保育の実践
～継続性のある異年齢の関わり～

参加者　八名

●研究協議の概要

○子どものつぶやきや、思いを汲み取った上での環境構成や援助の在り方
○異年齢交流をしていく上での職員の連携のとり方

●協議のまとめ

・保育者の願いと子どもの願いがうまくマッチした時に、奇跡（ミラクル）・共感・ワクワク・ドキドキが起きる。
・子ども達が自ら遊びを作り出し展開していく為には、保育者が子どもの興味関心を見取り、焦点化して遊びのコーナーを作ることで、子どもたちは自分の好きな遊びを通して自然と異年齢の関わりを持つことができる。（遊びのコーナーは、子どもが選べるくらいあると良い）
・コミュニケーションが取りづらい子に対しては、「こうなって欲しい」という保育者の思いをストレートに出すのではなく「どんな子であっても輝く瞬間がある」とするのであれば、子どもたちが遊ぶ中で輝いた場面を、まわりの子や本人に伝えていく事が保育者の役目である。
・異年齢の関わりの中で、保育者が子どもを育てるのではなく、子ども同士がお互いに育ち合うことを大事に考え、子どもの思いや考えを汲み取りながら、子どもと一緒に生活を作っていく事が大切である。

●助言者より

清泉女学院短期大学
准教授　長谷川　孝子

協議の中で、「自然な関わり」という言葉が良く出された。異年齢の関わりは良さもあるが、不自然な関わりがお互いの足かせにもなるという弊害もある。そこで、昔自然な形で地域にあった子ども集団について考えてみたい。そこでは、年上の子の充実した姿を年下の子が「見て真似る」ことで成長の目標や遊びの充実、思いやり等の育ちに繋がっていたと考えられる。つまり異年齢間で伝わるものをきっかけとして自己充実する中で発達が促されたのである。これにヒントを得て『子どもが伸び伸びと自己発揮し、主体的な活動を展開することにより育つものを大切にする』という保育の基本に立ち返ると、異年齢での関わりが本当にそれぞれの充実に繋がっているのかを考えなければならない。そして異年齢で関わることが目的ではなく、異年齢で育てやすいものと同年齢で育てやすいものがあることを意識し、異年齢の関わりにより「何を育てたいのか」を明確にする必要がある。さらに、異年齢による保育を展開するためには、全職員が全クラスの子どもの育ちに関わる発想が求められるだろう。

第6分科会

障がいのある子もない子も共に育つ保育

参加者　八名

●研究協議の柱

①配慮を必要としている子が安心して自分を表し、周りと関わり合える環境とは。
②配慮を必要としている子と共にクラス全体が育ち合うために、職員間の連携による情報共有や共通理解のあり方について。

●協議のまとめ

○子どもにとっての安心は何か、困り感や不安は何かを理解する事が大切である。特性や個性を周りが正しく知ることで、本人の困り感や苦手を取り除くことができ、過ごしやすい環境へ繋がっていく。
○周りが自分を認め、理解してくれたという気持ちはその子の安心になっている。「みんな違ってみんないい」という考え方が保育の中でも多様性を認め合う心に繋がっている。
○園の規模により話し合いの仕方や方法は工夫が必要であるが、保育士間での日々の気付きや疑問を話し合う意識を持つことが大切。職員間で日常的に子どもを肯定する言葉や、保育士の感嘆する言動は子ども達も感じ取る。保育士の障がいへの正しい理解や行動の積み重ねが、周りの子ども達に影響し、更には保護者や社会に変化を与えると信じ、みんなが安心して過ごせる社会になることを願う。

●助言者より

飯田女子短期大学
准教授　菱田　博之

○発達障害のお子さんは、周りの正しい理解や適切な対応により生活が改善していく。障害の対応の仕方については一人一人違うため、その子にとって何が良いのかを子どもを取り巻く環境や内面から考えていく。
○支援の目標は、①自分の特性を知り対応できること②困った時に周りにSOSが出せること。
苦手な事は周りが手助けしていくという意識を持つことで社会全体が変わっていく。
○「できた！」という思いに辿り着くことや「○○したい！」気持ちを引き出す関わりが大切。楽しい生活体験を通して、子どもの心で起きている内面的変化に気付き、子どもと共有し興味関心を広げていく。
○子どもの視点に立つということは、子どもが何を感じ何を求めているかを理解することを諦めないこと。そのためには職員間の話し合いや研修を行い、常に本人への理解に立ち戻れるような機会とすることが大切。

第7分科会

配慮を必要とする子どもの家庭や関係機関との連携

参加者　九名

●研究協議の概要

○保育園と家庭との良い関係づくり
○自分らしさを発揮し、集団生活を送るための支援や環境づくり
○関係機関との連携と就学のつなぎ

●協議のまとめ

・子を丁寧に見とり、スモールステップで、子に合った支援を続ける。
・保護者に寄り添う関わり方を心掛け、焦らず、時間をかけ、信頼関係を築いていく。
・専門機関に繋がらなくても、寄り添うことが大切。焦らず様子を見守り、SOSを逃さず、困り感を共有、良い面も伝えていく。
・個別支援をする中で、他の子やクラスにどう位置付けていくか?
支援の子がクールダウンをしてクラスに戻って来たら、「おかえり」と言ってくれた。保育士の関わりを子どもたちは見ている。クラスでお互いが育ち合っている。
・複数担任との連携や役割分担が大切。
・保育園と小学校の交流がある。それも良い繋ぎになっている。
・就学に対しての相談に踏み切れなかったり、途切れてしまったケースもある。継続しての支援は必要。

●助言者より

文化学園長野保育専門学校
専任講師　杉村　僚子

・家庭に寄り添い思いを受け止める。
・保育園と保護者との信頼関係を作ることの大切さ。
・子どもの姿をどう伝えるか?困り感だけでなく、うまくいった対応もセットで伝えていく。雑談もしながら。
・言葉は慎重に選んで伝える。保護者・家庭の状況に配慮する。
・ある程度時間がかかることを念頭におき、焦らない。
・年齢の子が誰でもできる内容をプログラミングする。自分を認めてもらう共感体験が大切。自己肯定感を上げる場面を多くする。
・全職員が情報を共有し、より多くの職員で多角的に子どもを見ることが大切。
・加配の先生は加配児も含めたクラス全体の子どもたちも見ていけるとよい。クラス集団として考えたとき、対象児と他児との関係調整だったり、活動の工夫をしていくことを相互的に行う。
・一定期間ごとに支援の評価を行い必要に応じて修正しながら、より的確な形で支援を続けていく。

第8分科会

職員の資質向上のための園内研修

参加者　十一名

●研究協議の概要

・園内研修のもち方はどうあったらよいか。
・研修を園内で共有したり深めたりしていくための取り組み方。

●協議のまとめ

・やってみたい研修を取り入れ、若い先生が主体となり、リーダーがレジュメを作る。意欲的にできるよう評価、フィードバックしていく。
・職員同士の温度差を詰めるために十分位の雑談の中で、若い先生からの意見を引き出す。
・パート職員研修を行う。保育、子どもの姿を共有し、連携をとり同じ気持ちで取り組めるようになる。
・保育を動画・録音をする。自分の動き、声がけはと振り返ることができ保育を客観的に見ることができる。
・研修は構えてしまいがちだが、日々の保育で学びたい、確かめたいことを行うことも研修なのではないか。
・エピソード記録、KJ法、媒体を使う等、様々な方法で研修も深まる。
・研修にまとまった時間をあてることが難しくなっている。少人数で短時間がベスト。短時間を継続していくことが質を高める保育に繋がる。
・継続は力なり、細く長くやっていく。積み重ねが大事、保育の質が高まれば、子どもに返り、保育者も変わる。サイクルとなっていく。
・取り組みの工夫、チーム保育を行う。チームビルディング研修でコミュニケーションを円滑にする。

●助言者より

北信保健福祉事務所
保育専門相談員
兼私学振興専門員　宮澤　栄一

・コロナになり、オンラインが増えてきた。園内研修の充実が命。園の実態に応じて創意工夫をしたい。
・悩みを語れる、困っていることが言える場をいかにして作るか、意見を言っていくことは大切。指摘ではなく共有し合うことが大事。
(例) 理解を図るための工夫として職員室のボードにカップを集めたいと記入。みんなに周知できる。
・「絵本を通して」子どもの姿、母親の対応が変わった。口頭詩から子どもを理解する方法もある。ドキュメンテーションの工夫、成長する姿を載せ、保護者へ発信する。
・「環境作りついて」可視化の大切さ図式化、工程表を作ると動線がはっきりし、わかりやすくなる。見通しをもって改善することが大事である。
・先生によって言葉の捉え方が違う。言葉の意味を大切にしながらお互いの共通理解を大事にしていく。

第9分科会

職員のチームワーク向上への取り組み

参加者　十一名

●研究協議の概要

○子どもへの理解や支援方法など、園全体での共有の仕方について

○チーム保育の具体的な取り組みについて

●協議のまとめ

・情報を共有できる手法は園の規模によっても違いはあるが、担任だけで問題解決するよりも、職員全員で情報を共有することで子ども感が変化していく。マインドセットを変えていくことも大切。

・SOAPの視点からワークシェアリングを行い、保育を様々な観点から協力し合い、活動の趣旨や願いを職員間で共通理解を深めた。

・子どもの姿、支援方法や手立てなどの引継ぎを丁寧に行うことや、遊びの場面の写真の中から、環境や子どもの想いなど様々な視点で読み取り、職員間で共有を図った。

・保育者の雇用形態、勤務時間が多様化しており、保育士間の連携が難しい。短時間で共通理解を図る工夫が必要。

・インシデントプロセス法によるケース会議、支援カード、付箋活用、雑談での共有などチームで取り組む方法を実践している。

・一人ひとりの保育者の子ども観・保育観の多様性を認め合うことで子どもの理解について多様な視座が生まれる。ベテランと経験の浅い保育者、正規と非正規の職員が一緒に考え、一緒に取り組む環境が大切。

●助言者より

信州豊南短期大学
教授　塩崎　正

・園全体で子ども理解や支援方法などを共有するためには、園内研修や日頃の実践を通して学び合う。

・保育には緊密なチームワークが求められている。チームワークを高めるためには、「同僚性」（問いかけ合う・高め合う・支え合う）、「社会人的基礎力」（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力）が必要。

・チーム保育を実現するためには、保育者の多様性（子ども観・保育観）を認め合い、ベテランと経験の浅い保育士の協働の場を創る。

・園を「学び合うコミュニティ」とするためにも、多様性と協働性が重要。「正統的周辺参加」の機会を新人に設けたり、「省察的実践」を実現する。

第10分科会

保育所機能や保育士の専門性を生かした地域の子育て家庭支援

参加者　八名

●研究協議の概要

①地域に根差した子育て支援の在り方とは

②様々な悩みや環境を抱えた家族への支援とは

●協議のまとめ

①小規模園は、地域の中で支援され育っていくが、発達に遅れがある子どもたちの対応として、周りの大人教育が必要である。

②保護者に対して、上から目線でなく悩みに寄り添いながら信頼関係をきづいていく事が大切。

③家庭でしっかり見ていく事が出来るように支援しながら、家庭だけではできないことを一緒にしていく。（共同養育）

④就学については、子どもがより良くこの先どうやったら幸せになるか（子どもの最善の利益）を最優先に考えていく。そのためには、保育士が専門性を持って対応していくことが求められる。

⑤悩みの共感性として保護者同士の繋がりを大切にし、保育士は教えるのではなく、共感していく事が大事である。

●助言者より

松本短期大学
教授　生田　恵津子

①保護者からの相談に際しては、期を逃さずに専門機関に繋げることが必要。

②母親の悩みに寄り添うだけでなく、保育における子どもや保護者の関わりの中で、「常に自己省察」し、保育に活かしていくことが求められる。（保育の専門性）

③加えて、「子どもは子どもたちの中で育つ」「環境としての保育士に努める」「安全基地があって子どもは主体的に育つ」「人や物とかかわりながら自分で生きていく力の基を育てる」といったことを考えたい。

④経験知がある（保育経験が長い）ということと、専門性があるということは同じではない。専門性には、経験知と学問知の両方が必要で、専門性を高めるためのアップデートが必要である。

⑤就学に向けては、園は過剰に小学校生活に寄り添うのでなく、「今・ここ」を大切にしたい。

⑥「すべての子どもと子育て家庭」への支援は、地域連携が欠かせない。子育ての周囲環境を作ることに地域の人的資源を巻き込んでいく事も考えていきたい。

第11分科会

小学校との連携のあり方

参加者　十名

●研究協議の概要

○子どもと保護者が安心して就学するために～保育環境・連携から接続を考える～

●協議のまとめ

発表された両園が保護者と小学校教諭対象に就学についてアンケートを実施しており、園の状況はそれぞれ異なっても、アンケートの内容や結果に共通する点が多く興味深いものがあった。中でも排泄や着替え等の自立については小学校と保育園とで達成ライン（達成の観点）に認識に違いがあることが分かり話題となった。園では概ね自立していると考えて送り出しても、小学校ではまだまだであると判断されることがあるようだ。生活面での自立については園が小学校の要求に合わせようとする傾向があるのではないかということが、話題にあがった。小学校順応させるためではなく、子どもにとって何が必要な事なのかを小学校教諭と話し合っていくことが大切であると小林先生から助言があった。小学校との温度差を明らかにし、その差をどうしていくか考え合うことが連携なのではないかという意見も出された。

就学に向けていろいろな能力をつけて入学できるようにしたいと願いがちだが、何よりも子ども達の情緒が安定し、「小学校が楽しみ」と思えることが大前提である。それには年長だけの保育を見直すのではなく、入所してからの保育が大切であることを確かめ合った。そして、「遊びは学びそのもの」であることを認識し、保育園での主体的な遊びが小学校の様々な教科につながることを保育士が理解していくことが大切である。

●助言者より

佐久保健福祉事務所
保育専門相談員
兼私学振興専門員　小林　昭寛

接続にあたり小学校教諭との合同研修開催が重要である。合同研修の中で「10姿」を中心に据え、小学校教諭と話し合いを行うことは、幼児教育への理解につながる有意義な機会である。そして、幼児期の豊かな体験により育まれた資質・能力が小学校生活へと受け継がれ、好奇心や探求心となって学びを楽しく追及していく原動力となるよう、保育園から小学校へと情報が共有されることが望ましい。

第12分科会

子育不安や児童虐待に対する支援

参加者九名

●研究協議の概要

○保育園から家庭への関わり方。どこまで踏み込んでいいのか。支援を求めない家庭へのアプローチの方法。

○個々の家庭の背景により、深入りはできないが、子どものよりよい育ちの為に園としてどこまで子育ての支援ができるのか。また、関係機関とどのようにして連携をとっていくのが良いのか。

●協議のまとめ

家庭へ声がけをする際に、寄り添うという姿勢よりも、なぜこの子に問題があったのかと、原因を探ろうとしてしまう。問題を抱えている家庭にとっては触れられたくないところでもあるので、寄り添うというスタンスはとても大事である。

○保健師だけではなく、助産師や医者、町内の方などつないでいく。つないでから支援をするのではなく、支援をしていくうちに、つながっていくものである。

●助言者より

松本短期大学
教授　生田　惠津子

・保育園を利用していない子どもを含めた全ての子どもと家庭への支援が大切と言われている。子どもは「自ら育つ力」を有する存在でもあるが、一方で「育てられる」存在でもある。とりわけ乳幼児においては環境により「育てられる」あるいは、「保護される」という側面が強くなるので、家庭と地域が機能しているかどうかは、子どもの育ちには重要な意味を持つと考える。

家庭内の子育て機能は、情報が沢山あり、量的にも質的にも変化してきている。その結果、家庭内で行なわれていた機能の外部化、社会化が進み子どもと向き合う事自体に不安を感じる親も多くなってきている。

・親の育ちへの支援では、親の子育てへの不安を軽減し、自信を持って、子育てができるようにし、子育てに必要な技術や経験を身に付けられる機会を設けること。親の就労支援のみならず、一時的保育など、心身共に親の生活を豊かにするサービスや、経験を共有しあう仲間づくり、また特に近年は親が一人の人間として生きていくという自己実現尊重も含み、親として育っていくための適切な支援が必要だ。

・基本的に保育園はいつでも誰でも来ることができ、子育ての一助になれないといけない。

第13分科会

食習慣形成と食を通した保育実践

参加者　十名

●研究協議の概要

○家庭と一緒に取り組む食育はどうあったらよいか。

●協議のまとめ

・午前中の活動で体を動かして遊ぶ事や給食の時間帯などを配慮し、空腹にする工夫。空腹は最高の調味料。

・家庭の背景がそれぞれ違うことを踏まえ、保護者と課題を共有する。家庭と保育士のかかわりや働きかけがとても大切。

・家庭への発信は給食のサンプルケース、給食だより、連絡帳の利用、給食ブログ、保育参加などで保護者に知らせることが大事。

・職員会やクラスでよく話し合い、ヒントを出し合う。

・みんなで一緒に食べるおいしさや自分たちで栽培したり、調理をした物のおいしさを知らせ、保育士の「おいしいね。」の一言も食育になる。

・食育活動にＬＰＤＣＡサイクル（観察→計画→実践→評価→改善）行動記録法を取り入れるのも有効。

・今回のレポートはＰＴだったが、異職種の方との課題の共有の大切さ

●助言者より

長野県栄養士会
管理栄養士　重倉　幸子

・「食育活動は部分を切り取るのではなく、保育計画の中で食育を考えていく」ことが大切。

・「保育所における食事の提供ガイドライン」の中に「保育所における食育に関する指針」の項目があり、そこで5つの子ども像が書かれ

①お腹を空くリズムを持てる子ども
②食べたいもの、好きなものが増える子ども
③一緒に食べたい人がいる子ども
④食事作り、準備にかかわる子ども
⑤食べ物を話題にする子ども

これらは「将来的に食を営む力」の基礎を培うことの育成であり保育所で行う食育において一番大きな目標といえる。

「大人は頭で考えて食べる。子どもはこころで食べる。」

「こころ」を形成するものは友だちであり、家族であり、環境であると思う。それをどう実践していくのが保育士の力にかかっている。

昨年からのコロナ禍において日々の保育には不安や苦労が多いことと思う。特に食事には「黙食」という言葉があったり、迷うことが多かったと思う。これからも続く可能性はあるが継続は力になる。家庭と保育現場と力を合わせ、毎日の保育にご尽力されるよう希望する。

第14分科会

家庭や地域との連帯による食育の推進

参加者　十一名

●研究協議の概要

○園での食育の取り組み

○保育所から保護者や地域への食育の発信の仕方

●協議のまとめ

○野菜作り、収穫、調理など体験する事で「何をさせるか」でなく、「食にかかわる体験によって何を育てたいか」が重要ではないか。

○地域の方の協力で、野菜作り、収穫、箱膳体験など、今までできていたことが、コロナ禍のため、会食や交流ができずにいたが、絵や写真などお礼の手紙を送り、「新しい生活様式」に対応し、地域との継続的な繋がりを持てるようにしていた。

○保護者も多様化しているが、収穫物を見せたり、ドキュメンテーション、給食だより、食育ファイル等、保護者の負担を軽減し、クイズ形式など取り入れ保護者も興味が持て発達にそったお便りで、保護者の困り感の解決になった。子どもを巻き込み、今のお母さんに合った方法で共有していきたい。

○食育を保育活動とし、保育士、給食員など皆で話し合いをし、子ども主体が実現できるようにしていく。

●助言者より

長野県こども家庭課
保育専門推進員
兼私学振興専門員　飯田　光子

○コロナ禍だが、できる事は何か（本来の食育）を考え、見つめ直す機会になったのではないか？

1．保育における食育の意義と目的と基本的な考え方

①食べることは生きること
②人と人をつなぐ力
③食べることへの関心の育ち
④食と心の関係

保育所の給食は一番の「食育」言い換えれば「食育は毎日の給食そのものである」。だから、保育計画に食育の視点を入れ、育てたい子ども像を示していく。単に栽培した物を調理し、「おいしかった」にとどまらず、目標・計画・実施・改善をしていく。いわゆるやりっぱなしの食育にしない。子どもへの食育は、健全な心身と豊かな人間性を育んでいく基礎であり、成長・発達に合わせた切れ目ない取り組みが重要である。今回の２例のご発表のように保育園と保護者と地域で相互に食育活動を行う。

子どもたちが、生活と遊びの中で、「食を営む力」を身につける、そんな、体験の積み重ねであってほしいと願っている。

第15分科会

地域社会に向けた保育所の取り組み
～「保育」をいかに社会に発信するか～

参加者八名

●研究協議の概要

○地域社会に保育園としてなにをどのように伝え合っていきたいか

○コロナ禍において地域交流を進めるうえで工夫したことは何か

●協議のまとめ

○いろいろな人と触れあいながら育っていくべき子どもたちが、親と子一対一で過ごす時間が長すぎている現状の中で、社会全体で育てていくことを訴えるためにも、保育の大切さを伝えていくのが私たちの使命である。具体的には発表園にもあったように、地域の方をまきこんで活動すること、その日の活動を見える形で発信すること（ホームページ、広報、ドキュメンテーション、文化祭への出展など）があげられた。

○地域交流が難しくなるコロナ禍だからこそ、一番身近な社会である保護者とのつながりを大切にすること、今だからこそできることを探していくことが大切ではないか。具体的には、ＺＯＯＭを使っての保護者懇談会や動画での発信があげられた。

●助言者より

上田女子短期大学
専任講師　関　裕子

○「子ども一人が育つには村中みんなの力が必要だ」とあるようにコミュニティの真ん中に保育があるべきである。地域性を活かして、顔の見えるコミュニティを形成していくことが大切である。

○原村保育園は、昔からのふれあいを続けている地域性があり、不易を大切にしているコミュニティである。地域の方からリクエストがあるなど、自分のこととしてとらえられており地域の活性化にもつながっている。

○りんどう保育園は、学校の先生と目的を共有することで中学生が主体となった交流や、地域資源から子どもが見いだした興味関心からはじまったファッションショーなど、多様性を循環させていくコミュニティである。子どもの主体性、つぶやきを重要視している保育だった。

○子どもが導かれ参加していくコミュニティが理想で、子どもが興味を持ったことに大人が目を向けじっくり見つめる、子ども時間の保障ができる地域を目指したい。

○コロナ禍の中でピンチをチャンスに変え、専門性を活かした発信をし、保育の質を社会にとらえてもらう機会にしたい。乳幼児の育ちの理解者を増やしていきたい。

第16分科会

公立保育所・公立認定こども園等の
使命と地域社会での役割

参加者八名

●研究協議の概要

○地域の中での保育園の役割、保護者や地域との連携について

●協議のまとめ

発表者のお二人からは、コロナ禍での地域や保護者との連携の難しさがあるこの頃ではあるが、地域とのつながりや保護者と連携することで、将来この地に戻って地域に貢献できる大人になる源になればというお話があった。分科会の参加者から、「この研究にあるようなかかわりができる環境がうらやましい」、「保護者を巻き込んで活動できたのは素晴らしいと思う」などの感想が出た。

公立保育園の良いところは、地域に保育園の様子を発信していくツールがたくさんあること。市町村の広報誌やケーブルテレビなどで保育園での活動を地域の方に見ていただくことができるので、連携しやすいのではないか。やまほいくの認定を受けている園が増えているので、中川村の事例のように保護者や地域を遊びの中に巻き込んでいくのもいいのではないか。私立の園長である海野先生からは「自治体が小さければ小さいほどボランティアで積極的に子どもの活動に参加できる。交流していくことで多方面に広がり、交流したことで幸せになれる活動をしていきたい」とのお話があった。

●助言者より

上田女子短期大学
専任講師　千葉　直紀

地域に子どもが存在していることが豊かさである。福島ではまだ子どもたちが戻っていない地域がある。また、台風19号の時に一時的に保育園がなくなってしまった地域があり、お迎えがとても大変になったりして、地域の保育園がなくなることはとても大変なことだということが分かった。地域に根ざす保育園がそこにあるということで、園の活動が地域に広がったり、地域の活動に園が参加したりという繋がりができていく。ただ、今は地域が遊び場として存在しなくなり、垣根が高くなっているように思う。また、コロナ禍で保護者との連携も難しくなっている。そんな中ではあるが、子どもが実感としてこの地で暮らしていると思えるような関りが大切である。

研究発表

「根っこを育てる保育をめざして」

～元気・やる気・笑顔の花を咲かせよう～

小諸市公私立主任保育士会

私達、小諸市は公立７園、私立２園の保育園で約２年間、第六十回長野県保育研究大会に向けてレポート作りと展示物作りを進めてきた。新型コロナウイルスが流行し、保育研究大会が開催できるか、心配の中、開催できることを皆で信じて、準備に取り組んでいた。どのような形で小諸の研究発表を伝えるか考え、手作りおもちゃで遊んでいる子どもの姿をオープニング動画に入れたり、研究発表の内容を写真を使って模造紙にまとめたりし、会場に来て下さる方と配信で見てくださる方のことを考え、作ってきた。

私達は、令和の時代を担っていく子ども達にとって、自らの経験から、感じ、考え、行動していくような『生きる力の基礎』を育む遊びの環境を用意し、「やりたい」「楽しそうだ」という意欲、興味、関心を広げ、自分の力に少しずつ自信を持ち、他者との関わりが楽しくなるような〝根っこを育てる保育〟に取り組んでいきたいと思い、研究をしてきた。

小諸市の梅花教育の理念のもと、梅の木の根っこにあたる乳幼児期の保育が、今後の子どもの育ちにとって重要な意味を持っていると考え、各園の特色を生かし、学び合ってきた。

取り組んできた内容をレポートにまとめ、記念すべき六十回の節目の大会で発表させていただき、参集と配信で見る、聞くことができる、新しい開催の仕方で、小諸市の保育を発信することができ、心から嬉しく思った。

この大会に向けて、皆で心を一つに、作り上げたことは、貴重な経験となった。こうした経験は、自分達の力となり、また子ども達、保護者のための保育の力につながっていくと感じている。

将来、子ども達が幼少期の豊かな経験を基に、やる気(木)のエネルギーで元気な大輪の笑顔の花を咲かせてくれることを願う。そして、未来の子ども達へエールを送り続けたい。そう願いながら、これからも日々の保育をしていきたい。

ありがとうございました。

ヒトの育ちを科学の視点で理解する
コロナ禍において大切にしたいこと

京都大学大学院教授　明和　政子

まず、長期化するコロナ禍でも、工夫をしながら保育を実践していただいていることに、感謝している。

保育そのものの社会的地位が向上していくためにも、保育士一人一人は、なぜこの職業を選び、この仕事をしているのかを認識し、自信を持って保育の発信を社会にしていくことが大切だ。

さて『ヒト』とは生物の一種である。今からおよそ二〇万年前ホモ・サピエンスという種から誕生し、長い年月をかけて、その時々の環境に適応することで、ヒトは生き延びることができ、今につながっている。

どのような環境がヒトにとって大切だったのか、科学の視点から考えていきたい。

身体接触

ヒトは授乳をする第一養育者の他に、乳幼児期に他者との触れ合いや関わりを持つことで脳が発達、活性化をし「心」を持つことができる。

ところが今、新型コロナウイルスパンデミックという人類未曾有の事態の中、新しい生活様式を受け入れることで、他者との触れ合いの機会が激減してしまった。これは、人類にとって大変な危機である。

『触れられる』ということが、乳児の脳にどのような働きかけをするのか。私たちは生後半年すぎの乳児を対象に

①他者が「身体に触れながら語り掛ける」
②他者が「身体に触れず語り掛ける」
③他者の声をスピーカーで聞かせる

以上の三つの場面の様子を脳波を使って実験をした。

その結果「身体に触れられずに」聞いた単語に比べて「身体に触れられながら」聞いた単語に対して乳児の脳が大きく活動していることがわかった。

特に言語処理に関わる『左側の側頭葉』と思考に関わる『前頭葉』の活動が高まることがわかった。

このことから、

○ヒトを含む哺乳類動物は、身体接触なしでは生存できない。
○乳幼児期の身体接触は絶対必要なものなのである。

コロナ禍ではあるが、保育士は乳幼児に対して笑顔で触れ、話し掛けることを大切にしてほしい。オムツ交換も、ただ排泄物を交換する場ではない。子どもと目を合わせ、声掛けをしてほしい。

そうすることで「アタッチメント（愛着）」が形成されていくのである。

共同養育

脳内の神経細胞（ニューロン）の一つに「シナプス」という物質があり、信号を受け取る突起と信号を伝導する突起から成り立っている。この「シナプス」が結びついていくことで、情報伝達が可能になっていく。

シナプス全体のネットワーク構造が爆発的に形成される時期は、胎児期から新生児期にかけてで、シナプスの密度が最も高くなるのは生後二、三ヶ月ごろと言われている。不思議なことにその後シナプスの数は次第に減っていく特徴を持っている。身体が環境と相互作用する過程で適応的な働きを担うシナプスは残され、そうでないシナプスは除去されていく。この現象を「シナプスの刈り込み」と呼んでいる。

例えば、ヒト特有の高度な認知機能を担う前頭前野のシナプスの密度がピークに達するのは生後四歳頃だ。その後ゆっくりと刈り込みが始まり、二五歳ころ成人レベルに成熟するのである。

脳の成熟に時間がかかるため、ヒトには共同養育（父母、祖父母、親戚、他人を含む養育）が必要になるのだが、現在はすでに共同養育は崩壊しており、親として必要な脳の成熟が困難に陥っている。親が親になっていくための現代版共同養育の仕組み作りが急がれる。

本来であれば、顔全体の表情が見えるように、できるだけマスクをしない方が望ましいと考えるが、コロナ禍では難しい側面もある。保育士は、子どもの発達のための根拠を示し、家庭では互いの表情が見える生活を促す声掛けをしていくことも役割だ。

このコロナ禍に乳幼児期を過ごす子どもたちの認知機能（ＩＱ）は、低くなるであろうという一説もある。そのくらいパンデミックは子どもに深刻な影響を与えている。そのため共同養育的保育園での集団生活、友だちや保育士と過ごす空間はコロナ禍においても大切にしたい。

特に前頭前野の発達期には異年齢での関わりがあると望ましい。異年齢の仲間と活動を共有する経験は前頭前野の発達に有効なのである。

そして子の親には「子育て、がんばっているね」と声をかけ、個人差の大きい『親性』が成熟していくように支援を続けてほしい。

第六十回長野県保育研究大会の講評

長野県県民文化部こども若者局こども・家庭課
保育専門推進員兼私学振興専門員
川上　真実

令和三年十月十七日、小諸市文化センターにおいて、第六十回長野県保育研究大会が開催されました。例年二日間かけて開催される保育研究大会を、今年度は新型コロナ感染症拡大防止対策のため、これまで初日に行われていた分科会は参集を避け、事前に研究発表及び意見交換の動画撮影を行い、その内容は後日配信をして視聴していただくことになりました。また、二日目の式典と記念講演は、参加人数を制限して参集参加型をとり、その模様も後日配信するといったハイブリッド型の新たな取組みとなりました。人数制限をして参集参加型の研修会で2年ぶりの開催となり、県下各地から百六十名余の先生方が出席されました。

開催地の小諸市は、噴煙のたなびくダイナミックな山容の浅間山が美しく、また、日本さくら名所百選、歴史公園百選に選定された小諸城跡懐古園のある詩情溢れる城下町です。ウェルカムビデオで小諸市を紹介し、温かい雰囲気の会場でした。

オープニングの小諸市の研究発表は、「厳しい風雪に耐えてこそ香りの高い梅の花が咲く」という梅花教育理念を基本としたものです。梅の木の根っこを子どもの生涯にわたる生きる力の基礎を培う重要な学びの芽生えの時期として捉え、子どもがもつ力を引きだすための実践研究発表が行われました。本研究テーマ「根っこを育てる保育をめざして」～元気・やる気・笑顔の花を咲かせよう～のもと、公立七園、私立二園、それぞれがサブテーマを設定し特徴のある研究に取組みました。

子どもとわらべ歌を歌いながら触れ合うことの心地良さを知ること、手指の機能を養う微細の発達にふさわしい手作りの玩具の紹介、生活環境の中で見たことのあるものを別のものに見立て、イメージを膨らませて遊ぶ子どもの姿、日常保育の様々な場面で子ども自ら意欲的に遊ぶ様子など、地域資源を有効に活用する保育が発表されました。日頃から主体的に学び合う、職員間の連携も素晴らしいものでした。

そして、日々子どもが繰り返し行う遊びや生活の中の「環境を通して行う保育」をまとめたレポートは、多くの写真で可視化され、またレイアウトの工夫もされており、環境構成の意図と子どもの関係を改めて考えるという意味で、自園の特性や特徴を活かす保育の参考になったのではないでしょうか。

記念講演では、京都大学大学院教育学研究科教授、明和政子先生をお迎えして「ヒトの育ちを科学の視点で理解する～コロナ禍において大切にしたいこと～」をテーマにご講義頂きました。先生が科学者として常に関心をもっておられることは、ヒトとは何か、ヒトはどんな存在なのかということです。ヒトも生物の一種（ホモ・サピエンス）に分類されるものの、ヒトだけがもっている脳や心の動きの道すじといった人間理解のための新しい学問領域を、科学的根拠に基づいてご講義くださいました。

人間の仕組みを知るため、霊長類であるチンパンジーに着目し、チンパンジーの行動を研究されるという大変興味深い話が拝聴できました。

乳児期にヒトは相手の感情を察知する能力を相手の目や口の動きを見て発達させていくそうです。ヒトは、他者との関わりを基本とした社会的環境のなかで生存、進化していく生物であり、身体接触なしでは生存できない。特に乳幼児期の脳と心の発達には、他者との身体接触が不可欠であり、重要だということを改めて再確認させられました。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、他者と密に接することが難しい状況が続いていますが、聴講した保育士にとっては、保育者と子どもの間に形成される特別な結びつきの愛情関係や触れ合う喜びの愛着形成がいかに大切なものなのかを再認識させられたご講義であったのではないでしょうか。

最後になりますが、令和元年台風第十九号のため、中止を余儀なくされた第五十九回木島平村大会の準備にご尽力頂きました皆様に感謝すると共に、その思いを今大会に引き継ぎ、企画運営、実行にあたり、ご尽力頂きました、小諸市の各担当者の皆様並びに実行委員会の皆様に、改めて感謝し厚く御礼申し上げます。

全国保育研究大会に参加して

茅野市　泉野保育園　主任保育士　北田　明子

今年度、秋も深まるなか、全国保育研究大会は、ライブ配信で行われました。本園も参加させていただき、コロナ禍のなかでも、学び合うことができたことを感謝いたします。

泉野保育園では、園内の自然環境を活かして遊び「感じて・気づいて・関わって」いくことを大切にしています。子どもたちの主体的な遊びにつながる環境や援助について学び合い、身近にいる様々な生き物に興味をもって活動した子どもたちの記録を全国の方に発表できたことは、とても光栄に思います。

わが園庭には、小川が流れ、泉野というだけあって、水が湧き出ている場所があります。先日、園内研修で、苔が好きな保育士に発表してもらい、園内や園の周辺には、日本では珍しい「ヤチゼニゴケ」があることを知りました。貴重な自然を大切に見守っていきたいと思いました。

今年の保育園の畑は、もみ殻や園庭の落ち葉、諏訪湖のヒシを使った肥料などを混ぜ込んでみました。するとなぜか、モグラがいなくなり、ミミズが多くなって、美味しい野菜が沢山収穫できました。今後も自然を活かしたサイクルを見直していきたいと思います。

春、近くの田んぼで見つけたオタマジャクシを年中児が飼育していました。一人二匹ずつペットボトルに入れて大事に育てていたのですが、だんだん死んでしまい、一匹残ったオタマジャクシが夏を過ぎ、秋を過ぎてもカエルになっていません。オタマジャクシは皆、カエルになると思っていたので、不思議な体験でした。子どもたちにどうしてなのかと投げかけてみると、「一人ぼっちでさみしいのかな」「仲間のカエルがいないとカエルのなり方が、分からないんじゃない？」「水がいっぱいで歩けるところがないからかな」「広い場所ならカエルになるかなぁ？」などと様々な意見が出てきました。不思議体験から環境や仲間の大切さを真剣に考える姿がありました。

子どもたちは、様々な生き物を捕まえては飼育箱で観察していましたが、死なせてしまう経験は、数えきれないほどありました。自然の中では、敵もいるから危険もあるけれど、生き物自身が生きやすい環境にいて、その方が生き物にとってはよいのだということを、自然に感じ取れるようになっていったと思います。

最近、昆虫が減ってきていると言われています。自然の中では、小さな存在ですが、食物連鎖の中でもなくてはならない存在です。昆虫は、沢山生まれてきますが、ほとんど自然淘汰されていくなかで、生き残る命の愛おしさを感じます。

保育室の中では、死んでしまう命も多いですが、それでも子どもたちが何度もチャレンジできる懐の深さが、自然の魅力だと思います。

以前、ある年少児のクラスで、こんなことがありました。保育室の中では、自分の気持ちを自由に表現することが苦手な子がいました。ある日、お散歩に出かけて、自然の中をたくさん歩きました。すると自分から、「風、気持ちいいね」と私に話しかけてきたのです。その子は、自分の頬を指さし、風が頬をなでる気持ち良さを感じて、思わず声がでてきたのでした。心地よい風、目の前に広がる自然の風景に、感性が刺激され、感動が言葉になったのでした。自然の中では気持ちが発散でき、心がほどけて人と人をつなげる会話が生まれてくることを感じました。自然には、人の心を動かす力があるのだと思います。

感動する心、相手を思いやる優しさや命の大切さを感じる心、失敗しても諦めずに、繰り返し取り組もうとすることなど、非認知能力の育ちの芽を大切にしていきたいと思います。

今、コロナ禍だからこそ、感染対策を十分に行い、子どもたちの自然や人、社会との関わりを見直して、一人一人の最善の利益を考えていくことが大切であると感じます。

これからも学びを皆で共有し、実践を振り返って職員間のチームワークを大切にし、子どもを中心とした保育をしていきたいと思います。

今までご指導いただき、お世話になりました皆様に、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

第64回全国保育研究大会に参加して

小諸市　さくら保育園　保育士　西田　淑江

この度、令和３年11月17日全国保育研究大会　三重県大会に東京国際フォーラムからのオンラインによるライブ配信という、私には全く想像のできない形での発表をしました。

ですが、どのような形であれ、自分たちの研究を全国に伝え、そして自分自身が学ばせていただける機会をいただけたことに、ありがたい気持ちしかありません。

まず３年前この研究を始める当初、「研究を通しての活動が、その後もずっと続くようなものにしたい。」という思いを持ち職員みんなで進めてきました。

研究のテーマにある『保育の社会化』。図書館を活用しながら保育を実践することで、保育園という場所は子どもたちがお互いに関わり学びあい成長していけるところ、主体的に育っていく子どもたちを支える保育士の存在があることを伝えられるのではないだろうかと考えました。

実際はスムーズにいくことばかりではありませんでした。ですが、研究で始まった新たな活動も、子どもたちにとっては自分たちで考えながら行った日々の積み重ねであり、本との生活や図書館との関係はしっかりと日常に根付いています。

これからコロナ禍が落ち着き、また再び自由に外へ出られるようになった時には、子どもたちには積み重ねたものを発信していけるだけの力が育っています。

そんな子どもたちの姿から、私たちは日々の生活を丁寧に保育していくことの意義を感じています。その中で子どもの育ちを支えるという保育士の役目、子どもたちの成長していく保育現場を保育の専門性を持ってしっかり外部発信していくことが保育の社会化になると信じて、これからも惜しまず地域の皆さんと交流を図りながら、共に子どもの成長を育み分かち合える関係性を築けるようにしていきたいと考えています。

また、保育園が地域へ自ら出ていき保育を展開していくことは、自分たちの力だけではできるものではなく、社会資源を中心に地域社会全体の協力が必要だということを学びました。

その為には、保育園を知り、理解をしてもらうことが大切となってきます。これからの地域に育っていく子どもたちにとって、必要な場所として保育園があり続けられるよう、試行錯誤しながら保育をしていきたいと思います。

教育・保育施設長専門講座を受講して

長野市共和保育園　大平和子

令和３年７月19日から８月２日の期間中に動画配信で教育・保育施設長専門講座を受講しました。今年度から園長になった私には６つの講義全てが学びになりました。

【保育をめぐる国の動向】

全国的にまだまだ感染が収束しない新型コロナウイルス感染症に関する保育園に対しての支援策、保育環境改善策事業について説明があり、保育所で感染防止用の備品購入をこの事業で補助していたこと、またこの事業は令和３年度も活用できる。

待機児童対策では、過去２年間で待機児童数を１００人以上減少することができた自治体へは減少傾向を継続させるため、保育の受け皿整備や保育人材の確保を引き続き支援をしていくこと。３年間１～１００人台で推移している自治体へは申込者の推移などを分析し、保育コンシェルジュや巡回バス等を活用したマッチング支援を実施していること。令和３年度から令和６年度にかけ４年間で約14万人の保育の受け皿を整備する『新子育て安心プラン』について、行政で行っている意義を理解することができました。

【教育・保育施設長のあり方】

教育・保育施設長として大切にしなければならないこととして、

①自らのミッション、羅針盤の確立：保育所保育指針を鏡とした自園の保育論の確立
②法令遵守、社会的責任、説明
③保育の質の向上、職員の資質向上・研修、自己研鑽に対する支援
④職業倫理、職場倫理の確立
⑤自らの専門性の向上のための研鑽
⑥施設運営・経理の専門性
⑦利用者、職員とよりよい関係を取り結ぶことのできる人間性
⑧戦略的思考と人権感覚
⑨職員が生きがいをもって長く働き続けることのできる職場環境を作ること。安心、安全の職場環境コロナ対策、衛生委員会など
⑩社会のありよう並びにそれに基づく子どもの家庭福祉・保育制度についての学びがありました。

これらを参考にして施設長として自分にできること、実践できることを考えてみました。「利用者、職員とよりよい関係を取り結ぶことのできる人間性」という点で、職員、保護者、地域とのよりよい関係性を作るために、相手の話を聞くこと（傾聴）を大切にし、よいチームワークを作っていくこと。「保育の質の向上、職員の資質向上・自己研鑽に対する支援」という点で、研修の情報、人員の確保など考え、職員が研修に参加できる体制を作っていくこと。「自らの専門性の向上のための研鑽」という点でも日々、時間に追われていますが、社会の動き、書籍、研修参加等から職員に伝えられるように学んでいくこと。以上のことを実践していきたいと思いました。

この研修は、園長として何が必要とされているのか考える機会となりました。

編集後記

新年、明けましておめでとうございます。

今回の保育しなのは、長野県保育研究大会の特集号です。今大会は、関東ブロック保育研究大会と同様、新型コロナウイルス感染症予防のため一部をオンデマンド配信するハイブリッド開催になりました。

分科会発表は、初めての動画配信になりましたので、慣れない動画作成に苦労された方も多いことと思います。

明和先生の記念講演と分科会は一か月間配信されましたので、視聴回数は延べ一万九千回を超えています。これまでと違い複数の分科会を視聴できることも、研修機会が多くなるとして好評でした。

小諸市実行委員会の皆さんには、二年間にわたりご尽力いただき、深く感謝申し上げます。

引き続き十二月には、子育て塾の講演がオンデマンド配信されました。こちらも多数の方に受講いただいております。

本年も、どうぞよろしくお願いいたします。

長野県保育連盟事務局